

学 位 審 査 報 告 書

新制  
経  
233

( ふ り が な ) 氏 名	サタバンドゥット インシシエンマイ STHABANDITH INSISIENMAY
学 位 ( 専 攻 分 野 )	博 士 ( 経 済 学 )
学 位 記 番 号	経 博 第 344 号
学 位 授 与 の 日 付	平 成 20 年 9 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	経 済 学 研 究 科 経 済 シ ス テ ム 分 析 専 攻
( 学 位 論 文 題 目 )	A Macroeconometric Model for Policy Planning of the Lao Economy (ラオスにおける新しい経済計画用計量経済モデルの開発)
論 文 調 査 委 員	主 査 教 授 大 西 広 教 授 森 棟 公 夫 講 師 J. マ ス ワ ナ

氏 名

サタバディット インシエンマイ

(論文内容の要旨)

ラオス経済がその主要なメカニズムとして市場システムを採用して以後、需要ベースのマクロ経済政策は、市場の良好な調整を保証するものとして、また、計画された産出その他の目標を達成するための重要な手段となっている。しかし、そのような政策を定量的に分析したものは現在までほとんど存在せず、この間隙をうめるのが本論文で提起されたマクロ経済モデルである。具体的には、このモデルは、①、ラオス経済に対する質的、量的な正確な理解、②、経済成長の諸要因の析出と分析およびそれに基づく将来予測、③、様々なマクロ経済政策の影響分析、④、ラオス経済についての今後モデル開発への先行研究として資すること、を目的としている。

これらの目的のために本論文では、基本的にはケインズ型ながら、供給サイドにも一定の内生化を行なったマクロ計量経済モデルが開発される。産出は各部門の需要に一致するように部門間にわけられ、価格は部分的には、短期需要と長期の供給能力とのバランスによって決定されるというメカニズムを採用している。その上で典型的な需要構成要因、つまり家計消費、私的部門および海外からの投資、輸出入、といった諸要因がモデルの中で内生化される。また、金融、財政政策の諸変数が、この論文の主要な関心であるところの、金融、財政政策の変化の効果を捉えるために導入され、政府の予算バランスも、政府の消費および投資支出に制約を与えるために取り入れられている。

このモデルは全体で 23 本の行動方程式と統計式、43 本の定義式を持ち、したがって内生変数は 66 個となるが、それ以外に 28 個の外生変数を持っている。このモデルの推測のためには、ラオスにおけるマクロ統計の欠如という大きな問題を処理しなければならず、そのため本研究では数多くの統計の推測作業を行なっている。その上で、それら統計データのサンプルが長期間に及ぶものについては方程式の推計を 1985 年から 2006 年までの期間について行なったが、全体としては 1991 年から 2006 年までが基本的な推測期間とされている。このモデルの妥当性は全体としてはファイナル・テストによって検証され、その良好な結果が確認されている。

各種のインパクト・シミュレーションと予測作業によって、政策・非政策変数の変化の影響を見極め、将来の計画目標を別の方法で確認する、ということが可能となった。たとえば、政府の財政金融政策は一般的に生産増に寄与することが確認されたが、より詳しく見ると、短期的には金融政策の方がより効果的であるが、中長期的には財政拡大、とりわけ政府投資の拡大の方がより効果的であることが分かった。税政策は成長促進には効果がないが、消費と価格を抑える効果があることが分かった。また、民間投資および海外からの直接投資は GDP の成長に効果的であること、為替レート下落は国内価格を高騰させるので為替レートには十分注意しなければ

氏 名

サタバディット インシエンマイ

ばならないことなども示された。

2006-2010年の中期国家社会経済開発計画に対して、本モデルの予測は政府がその計画にコミットするならば最低限の成長目標を達成できるであろうことを示している。大きな不確実性にもかかわらず、成長率は短期的には高い水準を維持した後、その後は低下するであろう。インフレーションは中期的にみて、満足できる水準に抑えられることを予測した。

氏 名

サタバディット インシシェンマイ

(論文審査の結果の要旨)

アジア「社会主義」の諸国はすべて途上国として存在し、かつその経済構造の市場経済化という条件が加わって特別の重要性を持っている。とくに本論文が対象とするラオスは市場経済化への移行が遅れただけではなく、「途上国」としての経済水準や経済構造の遅れがあり、さらにはマクロ統計の整備の遅れがある。そのような条件の下で、この特殊な状況をどのように経済計画用のマクロ計量経済モデルで表現するか、が本論文の出発点としての課題となっている。

より具体的に言えば、たとえばインフレーションの問題がある。「社会主義」の配給システムと市場の二重価格システムが徐々に後者に重心を置くようになる過程で、為替レートの下落や隣国タイの物価上昇によってインフレーションが引き起こされているからである。本論文のモデルはこの問題を為替レートやタイの物価変動率が輸入物価関数を経由して総体としての消費者物価(為替レートは直接にもこれに影響を与える)に影響を与えるものとして構築されている。また、途上国に一般的な供給制約の問題はマクロの総供給関数(正確には農業部門と非農業部門に分割された2本の生産関数)の設定とそれで導かれる総供給と総需要とのバランスが再び消費者物価を決めるというメカニズムが内生化されている。途上国の経済は先進国と違って需要制約だけを表現するケインズ型のマクロ・モデルでは表現できない。供給制約も同時に表現できるこうしたタイプのモデルの開発は他の諸国にとっても模範として大きな役割を持つものと思われる。

また、先進国を対象とする場合は殆ど不必要なマクロ・データの推計作業も、本モデルでは非常に重要な役割を果たしている。データ不足から先行するマクロ・モデルには方程式を8本しか持たないものもあった。これでは経済計画用のモデルとして役に立たないので、本モデルでは非農業部門の資本ストックに限らず、国内総資本形成、国内民間投資、民間消費支出、輸入デフレーターなどの諸価格指数といった変数まで推計作業を行なっている。この推計作業は、最終需要項目の細分割によって需要関数をより具体的なものにし、かつまたそれらを基礎に第一次、第二次、第三次の産業別需要を導くコンバーターの推計をも可能としている。モデルの分析結果として提示された数多くの政策提言や詳細な将来予測はこうした開拓的作業によって可能となっている。

しかし、こうして新たな成果を収めた本モデルにも課題は存在する。

そのひとつは、途上国にとって非常に重要な問題としてあるインフォーマル・セクターの内生化である。たとえば、問題の為替レートもラオスでは公式レートがストリートでのインフォーマル・レートに常に合わせられているとしても、とすれば、市場で各種の要因を反映して決定される関係を示したインフォーマル・レート関数と、それに適合的に調整される公式レート関数といった定式化がありうるだろう。

氏 名	サタバディット インシエンマイ
-----	-----------------

しかし、こうした改善も同様の構造を持つ途上国モデルでまだ行なわれた経験はなく、さらにラオスにおいて特に厳しい制約条件としてのデータ不足を考えれば、本研究の全体的な学術的価値を損なうものではない。よって、本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成20年7月16日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。